

稲門、最後の国学者

——古註尊重に徹した永井一孝の訓詁学——

金子大麓

戦前、早稲田界限の古本屋の書棚には、どの店にも永井一孝先生の著書が点々と並んでいた。あちこち点在するほどに先生の著作範囲は広がった。大学講義録から独立再刊された『国文学発達史』や『枕草紙選釈』『源氏物語選釈』などは装丁が幾通りもあって、それが余計に店頭を賑わせた気味もあるが、数ある中でも『校定枕草紙新釈』と『源氏物語諸抄大成』（巻一・巻二）などは先生の学風を最もよく伝えるものといえよう。

先生の学風については、佐々木八郎博士が「けだし明治・大正期の国文学界における主流の学風を反映した訓詁学の第一人者の一人である。」（『太陽』別冊『早稲田百人』P 81）と言われた通り、訓詁の学にあつたとみるべきであろう。しかしその訓詁の方法は単なる字句の穿鑿に纏繞する底のものではなく、その基礎は、驚くべき広汎な古典の渉猟と該博な有職故実の研究と精確な文法的考察によって築かれたものであつた。古書誌と有職の学は

早稲田専門学校文学科第一回生として関根正直博士の指導の下に、卒業後も孜孜として独り研鑽を積まれた成果であり、国文学は明治二十八年以来、多年大学の講壇において研究を進められた蓄積である。したがって先生の原典を大切にされることは大変なもので、教室で学生に対して最も熱心に説かれるのは「原文をようくお読みなさい」というお言葉だった。精力的な滔々たる講義の重圧に音をあげ、何とか減速させようと、蠅螂の斧よろしく、新刊の解釈書の受け売りの質問を試みると、先生から、きまつて「古註には何とありましたかな」と尋ね返されるのであつた。

「原文に忠実」——これは先生の一貫した古典解釈の基本であつた。それは『校定枕草紙新釈』の「凡例」からも知られよう。

一 通釈は出来得るかぎり原文の字句を逐つて之を口語に直訳したが、本文に省略してある語句や補充したが為に理解されやすい語句などは、本文の意義を明瞭ならしめる範囲に於て之を補って置いた。時又は法の如き、往々現代のと異なる場合があつて、口語に直訳したが為に、却て意義の明瞭を欠く

とか、或は異様な感を起さしめるやうな所は、多少之を變更して、現代語の表現法によつた所も全然無いではない。併し、注釈の方では、縦令語調を害するやうな事はあつても、成るべく原文の時法どおりに直訳し又は説明して置いたから、彼此を対照して古今の語法の相違を会得されんことを望む。

つまり解釈、とくに口語訳は能うかぎり原文に忠実な直訳を旨とされたが、ここで特筆さるべきは文法、とくに時相を重視された点である。これは、先生から親しく二ヶ年にわたつて国文法の演習を教授され、その厳しさに辟易しつつも国文法に関しては一応の自信を植えていただいたものの一人として確言しうるところである。

二

「古註には何とありますかな」——幾度となく繰返し聞かされたこのお言葉にこもる先生の真意を知つたのは、こんな偶然からであつた。——昭和十二年の夏、当時、橋純一氏主幹の『国語解釈』という月刊の小冊子があつた。その八月号の「源氏物語講余録」というコラム風の短文に次のような記述をみた。

御前わたり 御局は桐壺なり。あまたの御方々を過ぎさせ給ひつつ、ひまなき御前渡りに、人の御心をつくし給ふも……(有一ノ四、3)

諸註、更衣の出仕するをいふと解してゐるがここは帝が桐壺にいらつしやる際の「局々ノ前ノ通御」を申したと解するが

よからう。

まう上り給ふにも、あまり打しきる折々は……

とすぐ次にある。そこが更衣の出仕の事を申したので、帝よりの御でまじと、更衣よりの参上と、共に類繁なる由の文であると解せられる。これは漢文学の大家吉田増蔵氏の御説の聞書である。尚「御前わたり」の「御前」が陛下の御前の意ならぬ事、次の類例でも推し得られよう。左例は前をす通りした事らしい。

(中務内侍日記) 親の親ともいひぬべき人の許より、月のたよりにとたのめ侍るに、人々ぐしてまへわたりして見え侍るを恨みて、(群十一輯、七二五、下終)

昭和十二年六月末、私は刊行直後の吉沢義則博士の『対校源氏物語新釈』巻一を買い求めるや、たちまちその虜となつてゐた。永井先生口癖の「まず原文を……」が耳の底にこびりついてゐたこともあつたのだらうか、菅原孝標女もかくやとばかりの感激にひたつて、ひたすら『源氏』に没頭してゐた。湖月抄風に頭註・傍註を組み込んだ「吉沢源氏」はこれまでのどの解釈書よりも楽に読めた。それは著者の註釈の巧みに負うこと多大なのであつて、決して私自身の力の優れたためではなかつたのだが、若氣の至り、かくも自在に「源氏」を読みこなせると錯覚して自己満足に浸つていたのである。したがって、前記の橋氏の「御前わたり」の解釈も「吉沢源氏」で先刻承知だったから、「何を今更、新発見のように言つて」と思った。と同時に、永井先生の「古註では何と……」が気になつたので『湖月抄』をみると、「ひまな

き御まへわたり」は「更衣の局へ帝のおはして御方／＼の前をとり給ふ也（今一説略之）」と明記されているし、それに続く「まうのぼり給ふにも」も、その傍註には「是より更衣の帝へ參給ふ事也」と記されていて、橋氏が「諸註云々」というのは意味をなさない。そこで念のため、さらに別の古註を調べたいと思ひ、永井先生の『源氏物語諸抄大成』巻一を開いてみると、前記の『湖月抄』の註に続けて

(釈) あまたの御方々の前を更衣のわたりて清涼殿へ上り給ふを云ふ。旧説はひがこと也。

と萩原広道の『源氏物語評釈』の説が載っていた。してみると橋氏は、これまで萩原氏の『評釈』を頭から信じこんでいたため、今度の解釈を新説と思つたらしい。精確な解釈学者として敬服していた橋氏だけにいささかがっかりもした。しかし、当時広く読まれていた『王朝文学叢書』の「源氏物語」をはじめ、昭和十四年一月に賑々しく発売された中央公論社の山田孝雄博士校閲・谷崎潤一郎訳の『源氏物語』でさえ

更衣のお部屋は、清涼殿からは遠く隔つてゐる桐壺なので、お上りになるには、是非共大勢のおん方々の局々（まは）の前を通りにならねばならない。(谷崎潤一郎訳『源氏物語』巻一初版 P 65 / 66)

としてゐるのだから、それが当時の定説だったのだろう。

然るに永井一孝先生は、『評釈』説の引用に続いて、「按」の肩付で、ご自身の見解を次のように述べておられる。

〔按〕評釈の説ことわりに思はるれど、下に「參上り給ふに

も」とあり、これは更衣の參上り給ふを云へるにて、「にも」といふ字より考ふるに、帝の更衣の方へ渡り給ふに他の更衣女御達の御心をつくし、又桐壺更衣の參上り給ふにも云々と云ふにて「暇なき御前わたり」は帝の局へおはしますにはあらざるか。帝の局へおはしますこと当時例多し。村上天皇は物忌の日宣耀殿の女御の方へわたらせ給ひて、古今集を試みられしこと、又、一条帝の登華殿におはしまして大殿籠り給ひしことなど枕草紙に見ゆれば、こゝも帝の桐壺に渡らせ給ひしことにや。(『源氏物語諸抄大成』巻一 P 15)

と、『湖月抄』を支持し『評釈』を誤りとされている。すっかり嬉しくなつた私は、早速、橋氏へ、その発表は、すでに吉沢博士の『新釈』にも見えており、早くは昭和二年に既に永井一孝先生が『源氏物語諸抄大成』で指摘済みの旨を書き送つた。

すると旬日を経て、橋氏から、教示に対する礼言と、詳細は次号の誌上でという返事の葉書をいただいた。そして九月号の『国語解釈』には、京都の田中重太郎氏から詳細な指摘があったとして、次の文が載っていた。

○八月号四〇頁、源氏物語講余録の5「御前わたり」の解は、既に湖月抄に「更衣の局へ帝のおはして御方々の前を通り給ふ也」とあり、石田元季氏の新講源氏物語、最近平凡社より出た吉沢博士の対校源氏物語新釈も、湖月抄説に従ひ、殊に又雄山閣発行の国語国文学講座第七巻、池田龜鑑氏の「源氏物語講義」十二頁に広道説即更衣の帝の御前へまゐるといふといふ説の非なることを詳説してある。(中略) 田中氏のよ

く諸書に注意して居られる事に敬服し、私の不せんさくを慚愧致します。(『国語解釈』第二巻九月号P 37〜38)

白面の一書生の私が田中重太郎氏の碩学ふりを知ったのはこれが契機であったが、それはさておき、私が指摘して申し送った永井先生の『諸抄大成』については、潮月抄は別格として、田中氏指摘のどれよりも遙かに先見であるのに一言も触れていないは大いに不満であった。

やがて九月、授業再開直後の或日、講義の終った後、永井先生から声をかけられた。

「あなたは、橋純一さんに、私の渡氏物語諸抄大成について何か言われたそうですか。橋さんから、丁寧な挨拶をもらいましたよ」

「源氏の桐壺の『御前わたり』について、天皇が更衣のところへ通われるという解釈を、橋氏が新説のように言っていたものですか」

「あゝ、そうですね。橋さん、具体的なことはなにも言われないので、どんなことかと思っていました。しかし古典の解釈なんて、どれが旧説か新説か、決められないでしょう。自分たちの知る範囲だけのことです。現在ある古註以前の人たちだって、それぐらいのことは考えていたかもしれない。ただ文章に書いていないだけにすぎないかもしれないじゃないか」

そう言い終ると、先生は軽く笑って立ち去られた。傍で立ち聞きしていた学友たちは、口々に、「そんなこと言ったら研究上の新発見なんて、古文の解釈では成立しないぞ」などと言いあつて

いたが、私には妙に先生のその言葉が耳に残ったのであった。

これが契機で、先生に親しくしていただくようになり、沼袋のお宅へも幾度かお邪魔した。そして、佐々木八郎博士が『別冊太陽』の「早稲田百人」に、先生の直話として書かれたような、専門学校卒業後の数年間、上野の帝国図書館で古書を渉猟された当時のことなど、筆者も度々うかがっているうちに、古典を真に理解するには、徹底的に古文の世界に没頭しなければならぬのではないかと感ずるようになった。日頃先生の口にされる。「まず原本を……」「古註には何と……」のお言葉の真意も判ってきたような気がした。そして、自分もできうるかぎり、そういう体験を身につけねばと考へ出した。そうなってみると、『源氏物語諸抄大成』で先生がご自身の説までも古註と同じく古文体で書かれていることの意味も納得がいくのであった。先生に直接うかがったわけではないが、このことについての先生の意図は概ね次のようなことではあるまいか。

三

(一) 古文は古代人の心にかえて読むべきである。そのためには自己の言語的表現もつとめてその状態に置く必要がある。

(二) 古語の意味の微妙さを現代語で訳出することは至難である。その点、古註のような文語体をもってすれば、直截にそれを伝える。

(三) 現代の初学者にとって、古註の記述は解説が簡略に過ぎるものが多く、当時の読者にはよく通じて、もはや意を尽しかね

ることがある。それらを補いつつ古註に親しませる必要があるから。

——これらは全く筆者の臆断である。しかしもし永井先生が『諸抄大成』執筆の抱負をその巻頭に示されたとしたら、恐らくかような意味のことに言及されたに違いないと信するのである。ところが、先生はその点まことに無造作で、何等それらに触れられぬどころか、巻頭に掲げるべき「凡例」さえも、A5版を半折にして両面に印刷した一葉のパンフレットが巻一の扉の裏に挟み込まれているだけであった。だから、もしそれを紛失したら——実際、古本屋に並んだ中にはそれを欠くのが多かった——本書の利用価値は著しく低下するのである。

しかしそれはともかく、本書に傾注された先生の熱意にはなみなみならぬものがある。そのパンフの「凡例」によれば、「湖月抄を底本として、それ以後に出来た注釈書の説を取捨し、更に愚見を加へた」ものであり、とくに『湖月抄』以後の注釈書、『源註拾遺』、『源氏物語新釈』、『兩夜物語だみことば』、『源氏物語玉の小櫛』、『玉の小櫛補遺』、『源注余滴』等は「何れも湖月抄を底本として新しい研究を加へたものであるから、参考となるべき説は出来るだけ網羅する事とし、更に萩原広道の源氏物語評釈、源氏物語語釈、源氏物語余釈の説をも取捨した」とし、それらの諸説は「湖月抄に用いた諸抄の肩付はそのまま踏襲し、予の newly 取捨した諸註は〔拾〕〔新〕〔だみことば〕〔玉〕〔玉補〕〔評〕〔釈〕等の肩付をしてその出所を明らかにした。

〔愚按〕とあるものや、肩付の無いものは湖月抄の著者の説で、

〔按〕とあるのは、僅少であるが、思ひついたらまゝに愚見を記したのである」と述べてあるが、この〔按〕については「僅少であるが」という控え目の言い方に先生の人柄がにじみ出ているといえよう。『諸抄大成』収載の先人諸家の説は膨大な数にのぼるから、それらに比すれば〔按〕は僅少ともいえようが、それにしても一・二巻合わせて〔按〕の総数は一七〇箇に垂んとしている。

先人の説を検討総括した上に立って、欠を補い誤りを正した創見が、桐壺巻から権巻までの間にこれだけあるということは、大変な研究業績ではあるまいか。本書が『湖月抄』を模して自説を諸説の末尾に付記するような体裁をとらず、自説だけまとめて『源氏物語創見』とでも題した一書で世に問へば、学界への波紋は本書の比ではなかつたに違いない。しかしそのような行き方は先生の採られぬところ。まさに、先生が筆者に語られた前記の「古典の解釈なんて、どれが旧説か新説か、決められないでしょう……」というお考えと符節を合しているのである。

したがって先生の古典研究の学風は、『諸抄大成』全巻にわたる編述の傾向（とくに諸註の取捨選択の状態）そのものがそれだともいえるのであるが、小論では、とくに〔按〕を通して、先生の古典解釈法の特徴をまとめてみようと考ええる。

四

〔按〕の数は巻一56、巻二113、計169で、巻二が巻一の倍にのぼるが、それは『湖月抄』はじめ諸註の数が「須磨」以降減少しているのと、萩原広道の『評釈』が「花宴」までであることに原因

すると思われる。すなわち巻一には桐壺から葵までが収載されているが、その中に於ける「按」の主なもの、広道の『評釈』の説に基づいての自説、『玉の小櫛』に基づいての自説、全くの独自の説の三者に区別すると、前者11、中者5、後者27となるのに対し、巻二では、他説の引用に伴う自説の開陳は特定の書に集中せずに広く分散しているが自説の単独開陳数は91にもぼるのである。つまりこれは、巻一では『評釈』の解釈をかなり重んじて多く引用したこと、一般的に先人の註釈が緻密であつて自説を補わなくても文意が通じると考えたのに対し、巻二は先人の註釈数が減少しているのでその欠を補おうとした結果、自説の単独記述数が増加したと思量される。

次に「按」の内容を分析すると、語句の解釈60、一連の文意の解説39、文脈の解明30、旧説の補足24等が目立っている。とくに文脈に關しては、国文法の文章論に基づいての主述関係、修飾関係、挿入句等の指摘が、当時としては新鮮な研究だったであろう。また文意の解説は、流麗な擬古文を自在に駆使して簡明的確に情調の機微を伝える記述が多い。さらにまた旧説の補足説明に於ては、現代の初学者には簡略に過ぎると思われる先人の註を、実に行き届いた解説で敷衍し、後生指導の熱意を感じさせるものがある。

これに反して、先生日頃のご講義からすると一見意外に少なく感じるのは有職故実や文法に關する事項だが、それらはいずれも前記の文脈や語句の解釈の中に融けこんでいるから、あながち少ないともいえないであらう。

以下にそれらの一端を挙げてその特色を考えたい。

「語句の解釈」○「火危し」といふ、預が曹司のかたへにいぬるなり。——預が曹司のかたへに「積」「かたへ」とある本わろし。これは預りが曹子にゆきて火を取り来るべきためにいぬるなれば、傍にゆきて何かせん。「按」この説可也。異本に「に」なし。方へ也とあるに従ふべし。(巻一・夕顔P297)

巻一で多く採り上げられた広道の『評釈』の説を右のように支持する「按」もあるが、むしろ批評的なものが多い。「評釈」に次いで重視された宜長の『玉の小櫛』は、それに触発された「按」よりも、「小櫛」の意を尽していない面を補う形が目につく。

○怪しう世の人に似ずあえかに見え給ひしも——あえかに「玉」拾遺に、淡路国の郷の名の平安を引きて、此字にて心得べきかといへるは、もとは、一つ言なるべけれど、物語の「あえか」は、さらに平安の意にあらず。用ふる意の、うつりかはれるなるべし。「按」雅語訳解に、いとわかくて物はかなくよわき意也とあり。(巻一P309)

のように『玉の小櫛』が語義の変遷の指摘に止まるのを補うのに、鈴木胤の「雅語訳解」などの引用をもつてする場合もあるが、先生自身の下す解釈はさらに明快である。

○今の世の人のすめる経うち読み、行ひなどいふことは、いと恥かしくし給ひて、——いと恥かしくし給ひ「按」立派に行ひ給ふと也。「恥かしく」はそれと見奉る人が心に恥かしく思ふ程うるはしきこと也。(巻二・蓬生P346)

これを「大言海」の「優リタル人ニ逢ヒテ、恥ヂラハレテ相向ヒ悪シ」のような説明と比べると、初学者にも理解容易の解といえる。また同時に

○くらぶの山に宿も取らまほしげなれど、あやにくなる短夜にて、あさましうなかなかり——あさましうなかりなり
「按」生憎なる短夜にて、別るることの早ければ、逢ひ奉らぬよりは却りてつらく覚え給ふなり。(巻一・若紫P405)
の如く心憎いまでに巧みな言い廻しもある。

「文脈の解明」○おほよそ人だに、今日の物見には、大將殿をこそはあやしき山賤さへ見たてまつらんとすれば——「按」この文脈いと覺束なし。こゝは、「おほよそ人だに、あやしき山賤さへ、今日の物見には、大將殿をこそは見たてまつらんとすれば、遠き国より云々」とつゞけて見れば意の通ずる也。「おほよそ人だに……(中略)……遠き国より云々」といはんとし、更にその意味を強くせんが為、中途に更に「あやしき山賤さへ」といふ主格を加へて、「云々見奉らん」とつづけたる也。「おほよそ人だに」と先づ総主格を言ひて、更にその中の最も微賤なる「あやしき山賤さへ」を主格とし、今日の物見の見のがすべからざる由を強調せる也。なほ、金子元臣氏の校定本には、「なほよそ人だに」とあり。

(巻一・葵P651)

主述關係を核とする微に入り細を穿つ解説ぶりは先生の教壇の面影を髣髴させている。

「方意の解説」これは先生の得意とされるところであった。

○かしこき御身の程と聞ゆる中にも、御心ばえなどの……

——かしこき御身の程と云々「按」かしこき御身の云々、あまねくあはれにおはしまして」の句は、下の「いさゝかもさやうのみだれなく」につゞく也。さて、「がうけにことよせて、人の愁とある事なども、自らうちまじるを」の句は、かゝる高貴の御方は人の迷惑となる事などを行ふことを挿入句にてことわりたる也。この一くだりの意を云はゞ、この薄雲の女院は、高貴なる御方々の中にも、とりわけて御性格の至らぬ限なく慈み深く、やゝもすればかゝる高貴の方は、おのが權威に托して、人に愁をかくる事も自然にありがちなるに、この女院はいさゝかもかゝる御乱行なく、又人の奉仕する事がらにても、世の人の苦しむ事は御禁止遊ばされしと也。(巻二・薄雲P520)

の如く、古註を凌ぐ流暢な古文をもつて鮮かに文意を闡明されている。

「旧説の補足」

○……長き世のうれはしきふしと思ひ給へられしを、かうまでも仕う奉り御覽せらるるをなん、慰めに思う給へなせど、
『燃えし煙のむすばくれ給ひけんは、なほいぶせうこそ思ひ給へらるれ』とて今一つはのたまひさしつ。——今一つのたまひさしつ。「細」今一つは書きさしたる面白し。薄雲の御事にや。「河」「咲」「孟」同。「孟」或説ニ云々。秋好に心をかけ給ふ事にや云々。「師説」同。「眠」薄雲の事といへる可然歟。「新」秋好を恋ひ給ふなり。さしむかひてうち出で

がたくて、先づかく言ひふくむるのみ。「按」秋好に心をかけ給ふ事を指す也。源氏秋好の御前なれば、あらはに宣はずして、言ひさしたるなるべし。且又、下に「かやうなるすきがましき方は……（中略）……いかにかひなく侍るらん」と宣ひ、更に、「君もこそは」の歌につづけて「忍び難き折々も侍りしか」と宣ひて、秋好に懸想の意をはのめかし給ひ、又草子地にも「このついでに、えこめ給はで怨み聞え給ふ事どもあるべし、今少しひがごともし給ひつづけれ」とあり。

されば、こゝは秋好に対する懸想にて、源氏一度は宣ひさしたれど、やがて語り合ふまゝにその心の中をほのめかし給ひしものと見るべし。（巻二・薄雲P337）

の如く従来の諸説を網羅列挙した上で、「秋好説」に賛成の理由を、先生得意の文脈関係を中心に明快に論説されている。

「文法的事項」○客人の来んと侍りつる。厭ひ顔にもこそ。心のどかにを。御格子参りなん。——「釈」……「のどかにを」の「を」は助辞也。「按」「を」は詠歌の助詞也。（巻一・末摘花P464）

○さもおはせななと思ふあたりには、心もとなくて、思の外

に口惜しくな。——「細」紫上の御腹に御子の無き事也。「按」「おはせ」は「あり」の敬語也。「なん」は願望の助詞也。（巻二・薄雲P290）

の如く、きわめて簡単ながら、これらの文法的説明によって文意が明確化されている例がかなりのぼっている。

五

以上、一斑を見て全豹を卜するのは甚だ僭越ではあるが、日本古来の学問の伝統を深く継承された先生は、わが稲門の、最後の国学者であったといえようか。しかし国学者にまゝある頑固な自家固執の臭気なく、むしろ自説はつとめて抑制され謙虚を旨とされた。また常に初学者への懇切な補導の労を惜しまれなかつた点は先生の終生の教育者の一面を物語るものである。

また、先生が『諸抄大成』の「按」を古文で記されたことも、右の後生誘掖の念に多分に関係するであろうが、同時にその文章が、口語文の及びがたい妙味豊かな名文であることは、言文一致の文学活動を身をもって体験された先生なればこそと思われる。

寄贈図書（昭和58年6月以降）

56年度国文学年鑑

国文学研究資料館

元禄京都諸家句集

国文学年次別論文集

学術文献普及会

鶴見大学文学部論集

陸奥話記

梶原正昭

敬語論集—古代と現代—

相反する情念—坂口安吾の世界—

源氏物語論（上下）

矢島道弘

今の昔の話

村井順

雲英末雄

図書寮叢刊・新修本草残卷

宮内庁

鶴見大学

右大将道綱母（日本の作家9）

新典社

櫻井光昭

八少女（復刻版）

桐山学園女子大

村井順